

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5 年計画の 1 年度目)

1. 研究課題

(和文) 日本・アジアにおける差異の表象

(英文) Representations of Differences in Japan and Asia

2. 研究代表者

(氏名) 竹沢 泰子

3. 研究期間

平成22年4月から 平成27年3月まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究の目的は、人種の表象と社会的リアリティについて、とくに日本・アジアに焦点を当てて考察することである。人文科学のみならず自然科学をも射程に含め、分野横断的な研究体制をとる。人種は、概念としては生物学的実体がないことが近年の遺伝学研究などで明らかにされているが、医療、社会制度、美意識にいたるまで、強固に社会的リアリティをもっている。何ができるようにこのようなリアリティを生み出し維持させているのだろうか。その鍵を表象に求め、そのしぐみに光を投じることが本研究の狙いである。

欧米の人種表象の研究では、視覚的な表象に関しては膨大な研究の蓄積が存在するが、日本やアジアにみられる「見えない人種」についての、非視覚的な表象にかんしては研究例が多いとは言えない。「汚い」「臭い」「怖い」といった生活感覚で語られる差異。非可視的でありながら、強固に語られ続ける「穢れ」「血が違う」などの言説。日本や東アジアなどの地域に顕著に見られる、こうした「見えない人種」の社会的リアリティを創り出す表象のしぐみを炙り出すことに重点をおきたい。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

平成22年度は、公募によって3名を共同研究員として受け入れ、その他研究班の班員36名をあわせて、合計39名（うち学内10名、他大学29名）から構成される全国共同利用・共同研究の趣旨に沿う研究班を立ち上げた。平成22年5月から平成23年3月までの間に、実施した研究会は15回である。

なかでも平成23年2月19日に開催した「日本のレイシズム及び「沖縄人」をめぐる問題構成」（戸邊秀明氏および板垣竜太氏が報告）および同年3月25日-27日に沖縄で開催した「文理融合ワークショップ：沖縄人の表象をめぐる」（考古学の山口徹氏と新里貴之氏、形態人類学の

土肥直美氏、ゲノム人類学の木村亮介氏、文化人類学の前嵩西一馬氏、歴史学の成田龍一、映画研究の高みか氏が報告)は、本研究会として重点的に行ったものであり、文理にまたがる多様な研究者に報告頂き、日本・アジアのなかに位置づけた「沖縄人」をめぐって活発な議論が展開された。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度の研究成果のひとつとして、『人文学報』特集：差異の表象 (100号 印刷中)を編集した。

2月研究会では、戸邊秀明氏には「沖縄研究の変貌と「沖縄人」という問題構成の現在 —近現代史研究者の視点から」と題して、板垣竜太氏には「現代日本のレイシズム点描：朝鮮学校への攻撃・排除を事例に」と題して報告頂いた。これは、これまで欧米の事例を中心に展開されていたレイシズムの議論を、日本の文脈において再検討し、発展させようとする本研究班の試みの一環である。この際、成田龍一氏をはじめとする著名な研究者にも参加頂き、活発な議論が行われた。その結果、レイシズムにおける非視覚性の問題が、改めて明らかになった。

3月に開催した文理融合ワークショップ「沖縄人の表象をめぐって」では、通常の学会や研究会では顔を合わせて議論を行うことのない文系の研究者と理系の研究者が、「沖縄人」の表象をめぐって白熱した議論を交わした。特に、理系研究者が行うゲノム研究における人種概念が、文系研究者から争点化された。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

出版

『人文学報』特集：差異の表象 100号 印刷中

文理融合ワークショップ「沖縄人の表象をめぐって」 (3月25-27日) 於：ホテルグランビュール
ガーデン沖縄

共同研究会 (2月19日) 於：人文科学研究所